

主要通貨購買力平価（PPP）Q&A

Q1. 購買力平価の水準を知ることはどのようなことに役立ちますか？

A1. 実際の為替相場が購買力平価と一致していることは稀ですが、為替相場は長期的には購買力平価に沿って推移することが一般的です。

つまり、為替相場が購買力平価から大きく乖離している時は、いずれ購買力平価の水準に向かって動くだろうという相場の将来の方向性を知る手掛かりになります。また、現在の為替相場が購買力平価よりも通貨高に乖離していれば輸出に不利な状況にあり、通貨安に乖離していれば輸出に有利な状況にあるといったように、為替相場がもたらす国際競争力への影響を知る手掛かりともなります。

Q2. 購買力平価どのように算出されますか？

A2. 次式で算出できます。

相対的購買力平価＝基準となる為替相場×（日本の**指数／外国の**指数）

以下の指数を当てはめると、それぞれ「消費者物価 PPP」、「企業物価 PPP」、「輸出物価 PPP」を求めることができます。

Q2①. 消費者物価指数（CPI：Consumer Price Index）とは？

A2①. 全国の世帯が購入する各種商品（財やサービス）の価格の平均的な変動を測定するものです。

（総務省 統計局ホームページ：<http://www.stat.go.jp/data/cpi/4-1.htm>）

Q2②. 企業物価指数（CGPI：Corporate Goods Price Index）とは？

A2②. 企業間で取引される財に関する物価の変動を測定するものです。

（日本銀行ホームページ：<http://www.boj.or.jp/statistics/outline/exp/pi/excgp02.htm/>）

Q2③. 輸出物価指数（EPI：Export Price Index）とは？

A2③. 輸出品の物価の変動を測定するものです。

Q3. 「ドル円購買力平価と実勢相場」のグラフにおいて 1973 年を基準にしているのはなぜですか？

A3. ブレトンウッズ体制と呼ばれた戦後の国際的な固定相場制度が崩壊した 1971 年から 2 年が経ち、ドル円相場は一旦その頃に日米の実体経済を反映した水準に落ち着いたであろうという見方に基づいています。実際、その頃の日本の経常収支はほぼバランスしていたことも有力な根拠となっています。その結果でもありますが、1973 年を起点とする購買力平価分析は、その後の実勢レートとの関係を見ても整合的であるため、ドル円においては 1973 年を購買力平価分析の起点にとることがエコノミストの間で定着していると言っているでしょう。

Q4. 購買力平価のグラフが示すものは？

A4. 物価全般が上昇することはその国の通貨価値が下がることを表します（通貨相場の下落）。

ドル円のグラフを例にとると、変動相場制に移行した 1973 年以降アメリカの物価上昇率は、日本の物価上昇率よりも趨勢的に高いのでドルの購買力は円と比較して低下し、ドル相場は円に対して長期的に下落

していることが見て取れます。また、1981年から当時のレーガン政権が採った強いドル政策のために、ドル相場が購買力平価を離れて割高になり、結局1985年のプラザ合意で大幅調整を受けることになった姿もグラフから読み取れます。

Q5. 「Big Mac Index」というものを聞いたことがあるのですがどのようなものでしょうか？

A5. イギリスの経済専門誌「エコノミスト」に年に一度掲載されることで知名度が上がり、マクドナルドのビッグマックの価格によって各国の通貨の購買力を比較するもので、絶対的購買力平価を説明する1つです。

例えば、ビッグマック1個が米国で2ドル、日本で200円であれば、1ドル=100円でドルと円は同じ購買力を持つこととなります。この1ドル=100円がBig Mac Indexとなります。

このとき、実勢相場が1ドル=80円とすると為替相場は理論上、円高水準であると言えます。よって、今後、1ドル=100円に向けて円安に向かうと予測できます。

また、「エコノミスト」の表紙には当誌販売価格が通貨毎に表示されています。それらから、購買力平価を算出することもできます。

Q6. 購買力平価を分析する際の問題点がありますか？

A6. Q3にも関連しますが、相対的購買力平価では、どの時点を基準年にするかで現在の購買力平価の水準が変わってきてしまいます。基準年の採り方次第で、現在の相場水準が割高とも言えるし割安とも言えるということが起きてしまうのです。このため、購買力平価を分析するに当たっては、基準年選びも重要ですが、一旦選んだらそこから算出される購買力平価を絶対視するのではなく、結果として表れる現在の購買力平価の水準が実際の今の相場の割高感あるいは割安感と合っているか、Big Mac Index などのような絶対的購買力平価が示す評価と合致するかという確認も大切になります。

以上